外傷により発生した顔面 Dermoid Cyst

小池 聰之・川上 登史・小川 晃弘

A Case of Posttraumatic Cyst of the Face

Satoshi Koike, Takashi Kawakami and Teruhiro Ogawa

(Shikoku Cancer Center Hospital)

As epidermoid and dermoid cysts arise from the fusion line of ectodermal tissue during the period of embryogenic development, most of these cases are congenital.

On the other hand, rare cases of acquired epidermoid cysts are considered to develop at site of previous injury because of epidermoid tissue implantation.

A 55-year-old male with a history of bullet injury in the maxillary bone 38 years ago had sudden swelling of the left cheek.

In this case a posttraumatic dermoid cyst resembled a malignant maxillary tumor.

はじめに

一般的に dermoid cyst は、胎生期の各組織が融合する線上で生じるため、その大多数は先天性である。

後天性のそれは、以前にうけた外傷時の上皮 implantation により発症する。

今回我々は、弾丸が顔面にあたり上顎骨折を生じた際、頬部軟部組織の一部が迷入し、受傷後38年経て突然左頬部腫脹を生じ、臨床的に一見上顎悪性腫瘍を疑わせた症例を経験したので報告する。

症 例

患 者： ████████, 55才, 男性

初 診：昭和58年7月25日

主訴：左頬部の発赤腫脹

既往歴：昭和20年顔面に被弾（弾丸は、左眼球から左下顎を貫通）し、眼球摘出と左下顎骨整復をうけている。

家族歴：特記すべきことなし

現病歴：昭和20年被弾後、眼球摘出後の眼裂瘻孔よりときどき膿性分泌物が排出されるのみで、頬部軟部組織の腫脹は自覚していない。今回、昭和58年7月初旬より乗船中に左頬部軟部組織全体が発赤腫大したため、寄港地で下船し抗生物質等で応急処置をうけ紹介来院する（写真1）。

臨 床 経 過

初診時、左顔面とくに左下眼瞼部に拇指大の膿瘍を形成していたため、組織検査を兼ねて切

開排膿した。その切開創より中鼻鏡を挿入し組織採取をしようとしたところ、長さ3cm大の毛

写真 1

髪が多数存在していた。

以上の所見より、第1に外傷と関係する dermoid cyst の膿瘍形成、次いで上顎悪性腫瘍も念頭におき諸検査を行った。

顔面ゼログラフィー撮影を行うと、被弾時の下顎骨折整復部位は腐骨となり骨は吸収されてワイヤーのみ残っていた。上顎骨も骨折偏位し、一部骨欠損を生じていた(写真2)。

より詳細な情報を得るためCT検査を行うと、頬骨弓は内陥し、上顎骨前壁は部分骨折を生じ骨片となって頬骨弓の内側に存していた。また、上顎洞後壁も破壊されてはいるが、顎強直は生じていない(写真3)。

切開排膿後は、経過良好で頬部の腫脹も消退した(写真4)。

考

我々の症例の手術所見とCT所見とを併せ考えると、弾丸が左眼球、上顎骨、下顎骨を破壊

外傷性 dermoid cyst の原因となっている上顎骨前壁の骨欠損と皮膚片を除去する手術をすすめるも38年目に初めてこの様な症状が出たためもう少し様子をみたいとのことで根本的な手術は行っていない。

写真 2

写真 3

案

貫通するとき、上顎骨前壁は内方へ陥凹し、同時に頬部軟部組織も一緒に内方へ没入したものの

写真 4

と思われる。没入上皮よりの分泌物により翼突窩から側頭下窩に大きな膿瘍を形成したと推定される。

被弾後38年間膿瘍を生じなかった理由は、眼球摘出後の眼裂が完全に閉鎖せず瘻孔を形成し深部とのドレナージの役目をしていたためと思う。しかし、次第に毛髪が成長しこの瘻孔を閉鎖したため排泄口がなくなり、分泌物が貯溜し、これに感染が加わり急に頬部が発赤腫大し、一見上顎悪性腫瘍を疑わせる様な所見を呈した。

なお、膿瘍切開時、毛髪除去し、眼球摘出後の瘻孔部は十分開存しているため、毛髪が延びこの瘻孔部を再び閉鎖するまで頬部腫大は生じないであろうと考えている。

後天性 dermoid cyst について、1855年 Werhner³⁾ が初めて手のひらに出来た症例を報告している。当時この病因に関して色々な意見があったため、sebaceous cyst, epithelial

cyst, dermal cyst と云う題名で報告されている。1895年 Sutton²⁾ はこれらの囊腫を implantation cyst と報告した。

通常外傷性 dermoid cyst は、ほとんど手のひら、指、跖にみられ、受傷から発症まで長期間を要し、また外傷も非常に軽いため患者自身も昔その部に外傷をうけたことをほとんど忘れている。それ故、鑑別診断は発症部位により異なるが、我々の症例では上顎悪性腫瘍との鑑別が重要であった。

また、Marc B. Abrams¹⁾ らは、術中上皮を没入したため3年後顎関節部に生じた医原性 dermoid cyst 症例を報告している。

本疾患の原因となる外傷は、鈍器によるものがほとんどであり、外傷時上皮成分が真皮内に迷入するためである。我々の症例は、被弾し貫通したにもかかわらず、上皮成分が上顎骨骨折と共に迷入し受傷後38年を経て外傷性 dermoid cyst が発生したものである。

結 論

我々は, 54才, 男性で昭和20年弾丸が眼球, 上顎骨, 下顎骨を貫通し受傷後38年目に初めて発症した外傷性 dermoid cyst 症例を報告した.

(本論文は第23回鼻科学会で発表した)

文 献

- 1) Abrams, M.B., et al.: Epidermoid (Implantation) cyst after temporomandibular joint surgery. J Oral Surgery 35 : 587~589, 1977.
- 2) Sutton, J.B.: cit. by I).
- 3) Werhner, A.: cit. by I).

(原稿到着: 昭和59年 5 月 4 日
別刷請求先: 小池聰之
〒790 松山市堀之内13
国立病院四国がんセンター耳鼻咽喉科)